模造絶唱シンフォギア　～失敗作の求めしモノ～

影山鏡也

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしウルトラマンジードの失敗作が存在し生きていたら
もしその失敗作がベリアルの意志を継ごうとしたら
もしそのあとシンフォギアの世界に行ったら
そんな『もし』を集めて書いた小説です。
この作品は私の処女作ですので駄文だったりするかもしれません。

目　次

プロローグ　～失敗作から継ぐ者へ～　―――― 1
第一話　～失敗作の目覚めと変身～　―――― 3
第二話　～失敗作の戦い～　―――― 6
第三話　～失敗作の拘束～　―――― 9
第四話　～失敗作、二課へ～　―――― 11
第五話　～失敗作の自己紹介～　―――― 14
第六話　～失敗作と力の説明～　―――― 17
第七話　～失敗作の新たな名と防人の決闘～　―――― 20
第八話　～失敗作とミーティング～　―――― 23
第九話　～失敗作と新たな姿～　―――― 26
第十話　～失敗作と槍の修業～　―――― 31
第十一話　～失敗作ともう一つのライザー～　―――― 36
第十二話　～失敗作の単独行動～　―――― 41

プロローグ　～失敗作から継ぐ者へ～

私の名はＢ（ベリアルベイビー）Ｂ―４６

私は作られた存在だ。

私は詳しくは知らないがあ（ウルトラマンベリアル）の方の目的を達成するために存在し、それに疑問も不満もない。

だが私は廃棄された。

創造主（伏井出ケイ）から聞いた理由は「貴様はベリアル様のウルトラマンの遺伝子よりレイオニクスの遺伝子の方が強く出てしまった失敗作だからだ！」とのことだ。

確かに私はウルトラマン（模造品）に変身できるが長く維持できないため３分持たないことがある。

それでも兄弟（他の模造品）の中では一番いい結果を残せていた。

そのことを指摘したが私よりも出来のいい兄弟が生まれたとのことだ。

それを聞き私は廃棄されることを受け入れた、だが存在意義はなくさない。

ライザーといくつかのカプセルを持ち様々な星からリトルスターを集めることにした。

すべてはあの方が目的を達成されることを願って。

～廃棄されてから数年後～

現在５本のウルトラカプセルを起動させた。

そして宇宙に散らばっているカレラン分子が一か所に集まっているようなので私は地球へやってきた。

あの方はジードと異空間で戦っていた。

今私はカプセルを冷却しているため変身してあの方のために戦うことは出来ないが見届けようと思い異空間へ入った。

そこで私はあの方の過去、目的を知った、何度もよみがえり、そのたびに恨みを抱いていたようだ。

目の前ではジードがあの方へ

「疲れたよね・・・。もう終わりにしよう・・・・・・」

そしてあの方はジードに
「わかったようなことを言うな！」
そして二人は互いの光線を撃ち合い、そして、あの方が撃ち負けた。
「ジィィィィドォォォ!!!!!」
「さよなら・・・　父さん・・・・。」
最期にあの方はジードを模造品としてではなく息子としてみていたのだな。
そこに私はジードに対し嫉妬のような感情を抱いた。
だがそれもすぐになくなり虚無感に襲われた。
その間にジードは異空間から脱出したようだ。
あの方亡き今私の存在意義はもうない。
いや、あの方の意志を継ごう、あの方が探そうとした『守るべきモノ』、それを私、いや俺が。
今から俺はあの方の模造品の失敗作ではなく、ベリアルの意志を継ぐ者として。
形見として漂っているギガバトルナイザーの欠片と僅かなベリアル因子をカプセルに集め異空間から出た。
その瞬間光に包まれ俺は意識が遠のいていった。
そして俺はまだ知らない、その世界は私の知らない（シンフォギアの）世界であり、俺を受け入れてくれる存在に出会うことに。

第一話　～失敗作の目覚めと変身～

ここは地球。
ただし怪獣や光の巨人が存在しない宇宙の地球である。
～ＢＢ―４６ｓｉｄｅ～
（俺は異空間を出ようとして、光に包まれて、一体どうなったんだ。見たところここは地球の様だな。となるとジードや他のウルトラ戦士がいるはずだ。俺の目的を達成するには『守るべきモノ』を持っている奴らとコンタクトが取れれば早いのだがな。）
そう思いながら周囲に誰かいないか気配を探ってみた。
（なぜだ?･なぜリトルスターの反応がないんだ。確かにあの方がほとんど手中に収めはしたがまた拡散したはずだ）
俺はリトルスターの反応がないことに困惑しているとき声が聞こえた。
「生きるのを諦めないで!!」
そしてそのあとに歌が聞こえ光の柱が現れた。
（ウルトラ戦士かもしれない、行ってみるか）
そう考えた俺は地面をけった。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～響ｓｉｄｅ～
（あぁ、もう翼さんの新作ＣＤを買いに来ただけなのになんでノイズが発生してるの⁉で
も、今はこの女の子を守らないと）
私は女の子を連れて工場地帯の屋上まで逃げた。
息を整えていたらいつの間にかノイズに囲まれていた。
（私にできること、できることがきっとあるはずだ）
「生きるのを諦めないで⁉」
女の子にそういうと私の胸の中で歌が浮かんできた。
ｌＢａｌｗｉｓｙａｌｌ　ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ
次の瞬間私の中から光が出てきた。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～二課ｓｉｄｅ～

「反応絞り込みました、位置特定」

「ノイズとは異なる高出量エネルギーを検知」

「波形の照合、急いで！」

現在二課ではノイズ以外のエネルギーが出たことに櫻井了子を含めた多くのスタッフが驚いていた。

「まさか、これってアウフヴァッヘン波形⁉」

そして櫻井了子の言葉の後に出た〝ＧＵＮＧＮＩＲ〟という結果を見て

「ガングニールだと⁉」

と二課の司令である風鳴弦十郎は驚きの声を上げ、風鳴翼は息をのんだ。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～ＢＢ―４６ｓｉｄｅ～

光の柱が消えたがウルトラ戦士はおらず代わりにたくさんのへんてこな生物と小さな女の子、そして地球人にしてはおかしな格好をしたやつがいた。

「え？ええっ、なんで⁉私、どうなっちゃってるの⁉」

当の本人は困惑しているようだが。

そしてそいつは歌いながら女の子を抱えて跳んだりして逃げ回っている、驚いてるところを見るに自身のパワーを理解できていないのだろう。

大きいやつが出てきてからバイクで突っ込んでくるやつがいた。

（俺の目的のために出た方がいいだろうか？）

少し迷いながら俺はライザーを構える。

１本目のカプセルを起動させた。

現れたのは銀の手足に赤い体を持つウルトラマン、ドリュー、カプセルをナックルへ装填し次のカプセルを起動した。

次に現れたのは赤い目の青い模様の入った鎧を纏ったメフィラス星人、魔導のスライ。

２本目のカプセルをナックルに装填し、ライザーでスキャンする。
〈フュージョンライズ〉
「見据える魔導」
〈ドリュー〉〈スライ〉
〈ウルトラマンヴォルン　スライファイター〉
二つの遺伝子が交わり俺は巨人の姿へと変わっていく。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～響ｓｉｄｅ～
私は女の子を守るために逃げていたけど大型のノイズが現れて絶体絶命のピンチだった。
でもどこからかバイクがやってきて飛び降りてそのままバイクをノイズにぶつけた。
その人はトップアーティストの風鳴翼さんだった。
「惚けない、死ぬわよ。あなたはここでその子を守ってなさい」
翼さんはそう私に言った後翼さんは走り出した。
次の瞬間歌と共に翼さんも私のに似たものを纏って戦い始めた。
その瞬間大きな光が起こってその光がおさまると銀色の顔に薄紫色の体に黒のラインのある巨人になった。
（一体何が起こってるのぉ⁉）
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
つづく

第二話　～失敗作の戦い～

未知の存在に常識が通用しないことがある。
それは宇宙が違っても変わらない。
～ＢＢ―４６ｓｉｄｅ～
俺はウルトラマンに変身し、巨大なへんてこ生物に右手を前に、左手を胸元に持ってくる構えをとり対峙する。
（さて、今回はどれだけ持つかわからない、速攻で片を付ける）
「セァッ」
一気に近づき拳を放つがすり抜けてしまう。
（な、すり抜けただと⁉）
驚きはしたがすぐに右腕から細身のブレードを展開し斬りつけるがそれもすり抜ける。
（ブレードでも駄目か、物理が駄目ならエネルギー攻撃だ）
今度はブレードにエネルギーを溜め光弾を放つ。
すると光弾はすり抜けずに直撃し、炭になった。
（よし、エネルギー攻撃は通用する）
俺は攻撃が当たっていたことに安堵しているとカラータイマーが点滅し音が鳴る。
「ゼッ⁉」
（なっ⁉点滅開始が早すぎる）
今回はあまりにも短すぎることに俺は驚いた。
すると先ほどを同じ姿をしたやつが出てきた。
（これ以上はまずい、下手に撃てば強制的に変身が解除されてしまう）
だが他の形態の攻撃が通じるかわからない今下手に変えることは出来ない。
ここは撤退するべきか考えていると今度は別の歌が聞こえた。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～翼～
私はノイズとガングニールの反応があった場所に着いた。
女の子を守っているガングニールの奏者に惚けずに女の子を守っ

ていることを告げ天羽々斬を纏いノイズに向かって走った。
その瞬間巨大な光が発生しそれが巨人に変化した。
その巨人は大型ノイズに向かって攻撃を始めた。
最初の攻撃は効いていなかったが巨人が出した剣から出たエネルギーが直撃しノイズが炭化した。
「なっ⁉」
その光景に唖然としていると巨人から危険信号のような音が聞こえ我に返った。
（ひとまず他のノイズを倒す）
私は跳躍し大量の剣を具現化し放った。
ー千ノ落涙ー
次に私は空中でアームドギアを巨大化させ残った大型ノイズを蹴り貫く。
ー天ノ逆鱗ー
これでノイズは殲滅したがまだ問題が残っている。
〜ｓｉｄｅｏｕｔ〜
〜ＢＢ—４６ｓｉｄｅ〜
（青髪の女が残りを殲滅してくれたおかげで助かった。あいつはＡＩＢの関係者だろうか？とりあえずここから離れるか）
そう思いその場から離れようとすると青髪が
「逃がしはしない」
その言葉と共に俺の体は動かなくなる。
（ただでさえエネルギーが心許ないというのにこのままではまずい）
それに答えるように俺は維持できなくなり元の姿に戻っていく。
〜ｓｉｄｅｏｕｔ〜
〜響ｓｉｄｅ〜
翼さんや巨人が現れてノイズと戦ったりして驚いていると巨人が立ち去ろうとしたとき翼さんが巨人に向かって
「逃がしはしない」
って言った後巨人が小さくなっていき巨人がいた場所には赤いシャツに黒のズボンと革ジャンの黒髪の青年だった。

（えっ⁉あの巨人が消えたと思ったら人がいて、っていうことはあの人が巨人でってどういうことぉ⁉）

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

つづく

第三話　～失敗作の拘束～

情報を制す者は戦を制す、いつの時代、どの場所でもそれは変わらない。

～ＢＢ―４６ｓｉｄｅ～

あの青髪に呼び止められた後なぜか動くことができなくなり変身も解除された。

（相手がＡＩＢである確証もないが何かしらの情報が欲しい、とりあえずあちらの要求をある程度飲んであちらの情報を引き出すか）

そう思い俺は唯一動く口を動かし青髪に伝える。

「おいっ、青髪、俺にお前との交戦意思はない、この拘束を解いてもらっていいか」

（さて、こちらに交戦意思がないことは伝えた。あとはあちらの出方次第か）

そう考えていると青髪から返答が来た。

「なっ、青髪とは私のことか、そもそも貴様のような得体の知れない存在の拘束をそうやすやすと解くわけがないだろう」

「ごもっともな意見ありがとよ、ん？得体の知れない」

俺は青髪が言った一つの単語に疑問を持った。

（どういうことだ、地球では少なくともジードや他のウルトラ戦士達が地球人たちに認知されていたはずだ）

俺がそのことについて考えている間に周辺ではたくさんの自衛隊の奴らが作業をしており俺の周りには黒服の奴らが俺を拘束しようとしていた。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～翼ｓｉｄｅ～

（さて、謎の巨人が消えて代わりに男性が現れたのは驚いたが得体が知れないしこのまま拘束しておかなければ）

私がそう思って男性を見張っていると交戦意思がないといわれたが私はそれを突っぱねた。

（その言葉を信じて影縫いを解いたら逃走されようものなら目も当て

られない）
少しして自衛隊とトッキブツのエージェントが到着しそれぞれの対応を行った。
（次はあのガングニールの子の所ね）
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～ＢＢ―４６ｓｉｄｅ～
（おいおい、このまま殺されるなんてことはないよな）
俺は焦りつつも相手の出方をうかがった。
少し離れたところでは青髪、そして茶髪の男がヘンテコな格好をしていたやつが拘束していた。
（拘束するということはあいつらは仲間ということではないのか）
そんなことを考えていると青髪と茶髪がこちらにやってきた。
「あなたを拘束します」
そう言ってきた茶髪は俺に手錠をかけてきた。
「念のため聞くが抵抗しなければ俺が始末されることはないんだな？」
俺がそう聞くと茶髪は
「はい、そこは安心してください。ひとまずご同行お願いします」
俺はその言葉を半分信じて少しでも情報を手に入れるためにおとなしくついていくことにした。
（さて鬼が出るか蛇が出るか）
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
つづく

第四話　～失敗作、二課へ～

聞いただけの情報は実際に見たりやってみたりすると違うことがある。

～響ｓｉｄｅ～

私は手錠をかけられた後あの男の人と一緒に移動していた。

「あの～、なんで…学院に？ここ、先生たちのいる中央棟ですよね…？」

「黙ってついてきなさい。・・・このエレベーターよ」

「さ、危ないから、捕まってください」

「え？危ないって」

エレベーターに乗ると壁から出てきた手すりに捕まるといきなりドアのシャッターが閉まり、

「って、どあああああっ⁉」

（エ、エレベーターがジェットコースターみたいに落ちていくぅぅっ⁉）

外を見るととても広くてカラフルな壁に囲まれていた。

（私以外皆へ行きそうな顔をしてる、何もしゃべらないし気まずいなぁ）

「あ、あはは」

「…愛想は無用よ。これから向かうところに、微笑など必要ないから」

そこからは一言も話すことなく目的地に着いた。

（いったい何が待ち受けてるんだろう？）

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～ＢＢ―４６ｓｉｄｅ～

（ほう、〝微笑みなど必要ない〟か、さてさてどんな堅物組織なのやら）

目的地の扉を開けなあに入る。

「ようこそっ！人類守護の砦、特異対策機動部二課へっ！俺は司令の風鳴弦十郎だ」

ガタイのいい赤い髪の男がそう言い、その後ろでは横断幕に『熱烈

歓迎‼立花響さま？謎の巨人さま？』と書かれておりパーティー会場のようになっていた。
（…ＡＩＢではなかったか、それよりも思いっきり代表的な奴がいい笑顔で歓迎してるんだが、どういうことだ？）
俺は先ほどの言葉と違いすぎることに戸惑いながらも青髪を見ると溜息を吐いていた。
思ったよりも明るい組織なのか？など考えていると眼鏡をかけた女が近づいてきて
「そしてそして私は出来る女で評判の櫻井了子。お近づきの記念に一枚」
「えぇっ、いやですよっ！手錠をしたままなんて嫌な思い出になっちゃいますよっ！」
「確かにそんな記念はごめんだな」
そんなやり取りをした後
「そ、それよりあの、どうして初めて会う皆さんが、私の名前を…？」
「我々二課の前身は、大戦時に設立された特務機関なのでね。調査など、お手のものなのさッ」
と立花響という女の質問に得意げにマジックを披露しながら赤髪が答えていた。
そのあとどこからか鞄を持ってきた。
「ああ～っ！それっ、私の鞄っ！な～にが調査はお手の物ですかっ！」
（…なんだこの寸劇は）
そう思っている中赤髪が真剣な表情となり
「ははは、失礼したね。さて、君たちをここに呼んだ理由だが、協力を要請したいことがあるのだ」
「協力…もしかして、さっきのあの力のことっ⁉教えてください、あれは、一体なんなんですか？」
「うんうん、気になるのはわかるわ。でも質問に答えるためには三つばかりお願いがあるの。最初の一つは、今日のことは誰にもナイショ。理由はあとで説明するわね」
「は、はあ…。それであと二つは」

「とりあえず脱いでもらいましょうか？」
「へ？な、なんでぇ～⁉」
　そんな驚きの声が響いてから少し経ち、
「ごめんなさいね。メディカルチェックに協力してもらっちゃって。でも、大切なことだから許して？安心して、大きな異常は見当たらなかったわ」
「はあ…。最後の一つは？」
「それについては俺が言おう、といってもこれは君に対してではなくそこにいる彼になんだ」
（ずっと放置されてようやく話か）
「君のことについて名前から住所、戸籍や住民登録すらなかった。君は何者なんだ？」
　その質問をされ俺はどこまで話すか少し悩んだが意を決し答えた。
「俺はＢＢ―４６、あの方、ウルトラマンベリアルの模造品だった存在だ」
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
つづく

第五話　～失敗作の自己紹介～

未知のものに対しては柔軟な考えを持った方がうまくいくことがある。

～ＢＢ―４６ｓｉｄｅ～

「ベリアルベイビー、それにウルトラマンベリアルとは一体何なんだ？」

「なっ⁉ウルトラマンベリアルを知らないだと⁉」

あの方の模造品の部分に驚かれると思っていた俺の最初の自己紹介で別の意味で躓くことになる。

「一つ確認する。ここは地球でいいんだよな」

「？あたり前だろう。」

「ではなぜウルトラマンベリアルのことを知らない、あの方はクライシスインパクトを起こしたのにか⁉」

「待て待て、一体何の話だ」

「クライシスインパクトを知らないだと…」

（ここは俺の知る地球じゃないのか）

そのことに呆然としていると弦十郎が

「ひとまずあの巨人のことについて教えてくれないか？」

「…わかった。あの姿の名はウルトラマンヴォルン。俺のもう一つの姿でこのカプセルを２種類を組み合わせてライザーで読み込ませることでなれる」

そう言いライザーとナックル、そして『ドリュー』と『スライ』のカプセルを取り出した。

「それがあの巨人になるためのアイテムか」

「そうだ、そして俺はこの宇宙とは別の宇宙から来たようだ」

「どういうことだ⁉」

「まあ待て、まず俺の生まれから話す」

そして俺はウルトラマンベリアルの目的のために生み出された模造品であり失敗作であること、廃棄されたこと、あの方が亡くなりその意志を継いだこと、そして気づいたらこの世界に来たことを。

「なるほど、君は別の宇宙から来た人間で『守るべきモノ』を探しているということだね」
「信じるのか？」
「ああ、その方があの巨人のことについて説明がつく。」
　面倒なことにならなくてよかった。
「ひとまず君は家がないのだろう、二課の預かりで俺の家に住み込みしないか？」
「いいのか」
「その方が君の動きもわかるしな」
「なるほど、そういうことか。いいだろう」
「それと君も検査を受けてくれないか」
「わかった、暮らせる場所を提供してもらえるんだ。それくらい安いものだ」
「そうか、その前にもう遅い時間だし響君は送ろう」
　その後立花響は送られ俺はレントゲンを撮られたり血液を採取されたり他にもいろいろあった。
　正直検査の数が多くて疲れた。
　それとカプセルも調べさせてほしいといわれたので『ドリュー』と『スライ』を合わせて４本のカプセルを渡した。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～響ｓｉｄｅ～
　私は解放され自分の部屋に戻ってきた。
「ただいまぁ」
「響、もうこんな時間までどこに行ってたの？」
　私の声に答えたのは同じ部屋に住んでいる親友の未来だった。
「ごめん」
「近くでまたノイズが現れたってさっきもニュースでも言ってたよ」
「うん、でももう大丈夫だから」
　私は二課のこと、翼さんのこと、そしてあの巨人になった人のことを考えながらその日は眠った。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～

つづく

第六話　～失敗作と力の説明～

小難しい説明を聞くときは要点をまとめてみると理解しやすい。

～ＢＢ―４６ｓｉｄｅ～

数日弦十郎の家、というより屋敷に住まわせてもらっている間にわかったことはあのヘンテコなやつの名は『ノイズ』、触れるだけで人間を灰にすることができる化け物だそうだ。

（で、先日の検査の結果が出たということで立花響と一緒に呼び出されたわけだが、なぜまた手錠をかけられてるんだ？）

そんな疑問に答える存在はいるわけもなく櫻井了子から結果発表が行われた。

「それでは～、先日の結果発表～。初体験の負荷は残っているものの、体に異常はほぼ見られませんでした～」

「〝ほぼ〟ですかぁ」

「そうね、あなたが聞きたいのはこんな事じゃないわよね」

「教えてください、あの力のことを」

そのことについては俺も知りたかった。なんせ機密とかで話せないといわれたからな。

その言葉に俺と立花響以外は風鳴翼（弦十郎に教えられた）が何かを取り出し弦十郎が話し始めた。

「天羽々斬、翼の持つ第１号聖遺物」

「聖遺物？」

「聖遺物とは世界各地の伝承に登場する現代では製造不可能な異端技術の結晶のこと」

（つまりウルトラマンゼロの持つノアの盾のようなものか）

俺は昔聞かされたあの方の宿敵のことを思い出す。

「多くは遺跡から発掘されるんだけど経年による破損が著しくてかつての力を秘めたものは本当に希少なの」

「この天羽々斬も刃の欠片のごく一部に過ぎない」

「欠片にほんの少し残った力を増幅して解き放つ唯一のカギが特定振幅のはどうなの」

「つまりは『歌』、歌の力によって聖遺物の力は起動するのだ」
（歌、そんなもので起動するのか。確かに二人の姿が変わるときには歌っていたが）
俺は起動方法に驚きつつも納得する。
「歌の力で活性化した聖遺物を一度エネルギーに還元し、鎧の形に再構成したものが翼ちゃんや響ちゃんが身に纏う、アンチノイズプロテクター、『シンフォギア』なの」
「だからとて、誰の歌にも聖遺物を起動させる力が備わっているわけではない」
そんな風鳴翼の言葉から少し沈黙した後弦十郎が立ち上がり
「聖遺物を起動させ、シンフォギアを纏う歌を歌える僅かな人間を我々は『適合者』と呼んでいる」
「どぉ？あなたの目覚めた力について少しは理解してもらえたかしら？」
俺は一応理解したが立花響は理解できなかったそうだ。
「いきなりは難しすぎちゃいましたね。だとしたら聖遺物からシンフォギアを作り出す唯一の技術、『櫻井理論』の提唱者がこの私であることだけは覚えてくださいね」
そして立花響は聖遺物を持っていないらしいが彼女の心臓付近に食い込んでいる欠片が反応したそうだ。
そしてその欠片が２年前に死んだ天羽奏のシンフォギアも欠片だそうだ。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～響ｓｉｄｅ～
あの後翼さんが部屋から出て私は質問してみた。
「あの～、この力のことやっぱり誰かに話しちゃいけないのでしょうか？」
「君がシンフォギアの力を持っていることが何者かに知られた場合君の家族や友人、周りの人間に危害が及びかねない、命に関わる危険すらある」
「命に関わる」

その時私は親友の未来のことを思い浮かべた。
「改めて協力を要請したい、立花響君、君が宿したシンフォギアの力を対ノイズ戦のために役立ててにくれないだろうか」
「私の力で誰かを助けられるんですよね、わかりました」
そして私は協力することにした。
「それから志郎君、君にも協力を要請する」
へ？しろうって誰ですか？
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
つづく

第七話　～失敗作の新たな名と防人の決闘～

～ＢＢ―４６ｓｉｄｅ～

弦十郎がこちらを見て〝志郎〟と呼んだ。

（ここには外部の人間は俺と響しかいない、つまり…）

「弦十郎、〝志郎〟というのは俺のことか？」

「ああ、君の新しい名前だ。提案したのは了子君だがな」

「ええ、やっぱり今までの自分から変わりたいならまずその名前から変えてみましょ、それに、戸籍の登録ができるわよ」

その言葉に俺はうれしさを感じた。

「というわけで登録するにしても苗字も必要なわけだがどうする？」

「ふむ、では櫻井了子、おま、いや、あなたの苗字を使ってもいいだろうか？」

「へ？私の？」

「そうだ、俺の志郎という名はあなたがつけた、つまり名付け親というやつだろ」

「えっと、それってつまり」

「俺にはいない母親という存在なのだろう、この名をもらったとき何か温かいものを感じた」

「そう思ってくれるのはいいんだけど、未婚で子持ちというのは…」

「そうか、すまない。俺一人舞い上がってしまった」

俺は少し悲しい顔をしてしまった。

それに耐えられなかったのか。

「あっ、いや別にそれでもいいのよ。迷惑には思ってないから」

「そうか、ありがとう」

「では、櫻井志郎で登録しておくぞ」

そんなわけでこれまでの〝私の名〟から志郎という名に変わった。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～響ｓｉｄｅ～

あの人の名前が志郎さんになってから私は翼さんの所にいて二課に協力して多くの人を助けることを伝えに行くと

ノイズの発生を知らせるアラートが鳴り弦十郎さんの静止を聞かずに現場に向かった。
ノイズを倒し終わり（まあ私は全然倒せなかったんですけど）、翼さんに今後のことを伝えた。
「翼さ～ん、私今は足手まといかもしれないけれど一生懸命頑張ります。だから、私と一緒に戦ってください」
その言葉に翼さんは振り向き、一緒に戦ってくれるのかと思っていた。
でも、返ってきた言葉は違った。
「そうね、あなたと私、戦いましょっか」
「えっ…」
そして翼さんは刀を私に向けてきた。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～ＢＢ―４６　志郎ｓｉｄｅ～
俺は弦十郎と了子さんの近くで映像を見ていた。
風鳴翼と立花響が戦う空気になると弦十郎が
「なっ、なにをやってるんだあいつらは」
「青春真っ盛りって感じね」
「なるほど、あれが青春というやつか」
後に〝青春は仲間と戦うこと〟だと解釈した俺は「それは間違えだ」と指摘された。
「司令、どちらへ？」
「誰かがあのバカ者どもを止めなきゃいかんだろうよ」
「なら俺も行こう」
弦十郎の言葉に俺が必要になるだろうと思いついていく。
（いや、弦十郎速くないか？なんで俺の軽い本気と並走できるんだ、もしかしてこいつ本当は異星人じゃないのか？）
そんな疑問を持ちながらも現場に着くと風鳴翼がこの前のデカい剣の技を使っていた。
それに対し立花響は呆然としていた。
（助けに入るか、って弦十郎のやつ何やってんだ死ぬぞ）

そんな俺の思いを裏切るように弦十郎の拳一発で地面が大きな被害を受けたが本人は無傷で防いでいた。
「あ～あ、こんなにしちまって、なにをやってんだお前たちは」
(それよりもあんたのやったことが気になるよ)
「この靴高かったんだぞ。一体何本の映画を借りられるか」
そして弦十郎は風鳴翼に近づき
「らしくないな翼、ろくに狙いもつけずにぶっ放したのが、それも…、お前泣いて」
「泣いてなんかいません。涙なんて流していません。風鳴翼はその身を剣として鍛えた戦士です。だから…」
「翼さん、私ダメダメなのはわかっています。だからこれから一生懸命頑張って奏さんの代わりになってみせます」
立花響の言葉は地雷だったらしくビンタをかました。
そしてその日は解散することになった。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
つづく

第八話　～失敗作とミーティング～

仲良くなるならまず互いに思っていることを全部さらけ出してみることも手だ。

～志郎ｓｉｄｅ～

あの私闘の件からひと月経つが立花響は戦いにはついていけていなかった。

そして今日はミーティングがあるらしく俺も弦十郎と了子さん、そして風鳴翼と待機していた。

そして最後の一人、立花響が来た。

「遅くなりましたすみません」

「では、全員揃ったところで〝仲良しミーティング〟を始めましょ」

その言葉と共に画像が投影された。

「どう思う？」

「いっぱいですね」

「はは、全くその通りだ。これはここ1か月にわたるノイズの発生地点だ。ノイズについて響君が知っていることは？」

弦十郎の質問に立花響はノイズのことについて意外と詳しいらしい。

その後了子さんが補足として付け加える。

「ノイズの発生率は決して高くないの。この発生件数は誰の目から見ても明らかに異常事態」

「そうなのか。俺はこのくらいが当たり前だと思っていたがな」

「まあそういうことだからそこに何らかの作為が働いていると考えるべきでしょうね」

「作為、てことは誰かの手によるものだというんですか」

その言葉の後に風鳴翼は

「中心点はここ、私立リディアン音楽院高等科。我々の真上です。サクレストＤー『デュランダル』を狙って、何らかの意思がこの地に向けられている証左となります」

「あの、デュランダルって一体？」

「俺も知りたいな、何だそれ？」
　その質問に友里あおいと藤堂朔也は
「ここよりもさらに下層、『アビス』と呼ばれる最深部に保管され、日本政府の管理下にて我々が研究しているほぼ完全状態の聖遺物。それがデュランダルよ。」
「翼さんの天羽々斬や、響ちゃんのガングニールのような欠片と違って完全状態の聖遺物は一度起動すれば常時１００％の力を発揮する。そして奏者以外の人間も使用できるであろうとの研究結果が出ているんだ」
「それが私の提唱した櫻井理論。だけど完全聖遺物の起動には相応のフォニックゲイン値が必要なのよ」
「ん～？」
　相変わらず立花響には難しいらしい。
　さらにほかの国から電子的な侵入を大量にされているらしい。
（正直大丈夫か、この国）
　そんなことを思っていると風鳴翼は表の仕事があるらしく緒川慎次と共に退室した。
（表と裏の顔を両立するのは大変そうだな。そういえばあの人もそんな感じで活動していたっけ）
　俺は創造主のことを思い出した。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～響ｓｉｄｅ～
　私は仲良しミーティングの後、未来からのメールでレポートの提出に言った。
「時間過ぎてたけど受け取ってもらったの？」
「今回だけは特別だって。これで約束の流れ星見られそうだ」
「響はここで待ってて、教室から鞄とってきてあげる」
「そんなのいいのに～。…もう行っちゃった。足速いなぁ、さすが元陸上部」
　その時本部からのアラームが鳴った。
「出ないわけにはいかないよね」

そのあと未来に今晩の流れ星が見れないかもしれないことを伝え、ノイズを倒しに行った。
「流れ星見たかったぁ、未来と一緒に」
残り一体のノイズになったとき外に逃げられ跳んできた翼さんに倒された。
「私だって守りたいものがあるんです。だから…」
『だから?で、どうすんだよ?』
知らない声が聞こえ私と翼さんはその方向を見ると銀色の鎧を着た人がいた。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
つづく

第九話　～失敗作と新たな姿～

覚悟をもった者は時に恐ろしいことをしてくる。

～志郎ｓｉｄｅ～

今回も俺の出番はないということで立花響達の戦闘映像を見て待機していた。

（立花響は少し暴走気味な戦い方だが前よりはマシか）

そんなことを考えていると〝Ｎｅｈｕｓｈｔａｎ〟という文字が出てきた。

「馬鹿な⁉現場へ急行する。志郎君も来てくれ」

「わかった」

「何としてでも鎧を確保するんだ」

（この感じ、未知の聖遺物だからというわけではなさそうだな）

そんな場の空気を読み取りながら弦十郎の言葉に従い了子さんと共に車で向かった。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～翼ｓｉｄｅ～

「ネフシュタンの鎧…」

「へぇ、てことはあんたこの鎧の出自を知ってんだ」

「2年前、私の不始末で奪われたものを忘れるものか。なにより、私の不手際で奪われた命を忘れるものか」

私は2年前の出来事、ネフシュタンの鎧の起動と奏を失ったことを考えながらアームドギアを構える。

（時を経て再び揃って現れるという巡り合わせ。だがこの残酷は私にとって心地いい）

だが、いざ斬り合わんとするときに立花が抱き着いてきた。

「やめてください、翼さん。相手は人です。相手は人間です」

その言葉に私は咄嗟に

「「戦場(いくさば)で何を馬鹿なことを！」」

相手も同じことを思ったようだ。

「むしろ、あなたと気が合いそうね」

「だったら仲良くじゃれあうかい」
そう言って相手はネフシュタンの鞭で攻撃してきた。
私は立花を突き放しそれを上に避け、それに合わせて攻撃する。
―蒼の一閃ー
だがその攻撃は横にはじかれた。
驚きはしたが次は接近戦を行うがそれもすべて防がれ蹴りを入れられる。
（これが完全聖遺物のポテンシャル…）
「ネフシュタンの力なんて思わないでくれよな。あたしのてっぺんはまだまだこんなもんじゃねぇぞ」
その言葉と共に一撃、二撃と次々攻撃してくる。
「翼さん⁉」
「お呼びではないんだよ。こいつらでも相手してな」
その言葉と共に持っていた杖を構えると緑の光を発し複数の小型、大型ノイズが現れた。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～志郎ｓｉｄｅ～
「なっ⁉ノイズを操っているだと⁉」
車での移動中現場の現状を聞いていた弦十郎が驚きの声を上げた。
「やばいんじゃないか、大型の相手だけでも俺が行こう」
「頼んだぞ」
その言葉を受け俺はライザーを構え2本のカプセルを起動させた。
〈フュージョンライズ〉
「見据える魔導」
〈ドリュー〉〈スライ〉
〈ウルトラマンヴォルン　スライファイター〉
変身した俺は現場へ急いだ。
現場では立花響が捕獲されており本人もぶつぶつ言っていた。
「なっ、このタイミングで出てきやがるのか！」
（あいつが確保の対象か、だが今は）
「セァッ」

（ノイズの相手だ）
俺は近くにいたノイズに拳を叩き込む、前回と違い拳はすり抜けることなく当たる。
（今回はすり抜けなかった。前との違いはなんだ？）
違いといえば場所とシンフォギアの歌がよく聞こえるほど流れていること位である。
（とりあえず物理で行けるなら何でもいい）
そう締めくくり俺はブレードを展開し斬り払っていく。
「そんなにがっつくならお代わりをくれてやるよ」
鎧を着た奴はノイズをさらに呼び出した。
（正直物理が行けるようになったとはいえ、一気に大量の数は相手したくない）
そう思った俺は姿を変えることにしライザーを構える。
1本目を起動させる。
現れたのは銀の体に赤いライン、そして3本のウルトラホーンを持つウルトラマン、カラレス。
カプセルをナックルへ装填し2本目のカプセルを起動した。
次に現れたのは赤い発行体のデスレ星雲人、炎上のデスローグ。
2本目のカプセルをナックルに装填し、ライザーでスキャンする。
〈フュージョンライズ〉
「沈黙の炎上」
〈カラレス〉〈デスローグ〉
〈ウルトラマンヴォルン　ファイヤーボーン〉
スライファイターを違い今回は炎に包まれながら遺伝子によって別の姿を変えていく。
炎の中からは鈍い銀色に黒いライン、そして左腕を覆うように骨のような鎧があった。
「…シュァ」
「志郎さんが変わった⁉」
「姿を変えただと⁉」
「なっ⁉隠し玉持ってやがったのか」

三人とも驚いていた、そのタイミングでカラータイマーが鳴り始めた。
俺は左腕を上に掲げると周りに炎の玉が発生した。
「…ジョア」
（時間もないし一気に行かせてもらう）
左腕を振り下ろし炎の玉を操りノイズを撃破していく。
そんな中いつもとは違う歌が聞こえてきた。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～翼ｓｉｄｅ～
（まさか違う姿もあるとは）
私は志郎さんが姿に変わったのに驚いたがすぐに意識を切り替えネフシュタンの鎧確保のためにあの歌を歌うために動き出す。
「確かに私は出来損ないだ。この身を一振りの剣と鍛えてきたはずなのにあの日、無様に生き残ってしまった。出来損ないの剣として恥をさらしてきた。だがそれも今日までのこと。奪われたネフシュタンを取り戻すことでこの身の汚名をそそがせてもらう」
「そうかい、脱がせるものなら脱がして、なにっ」
ネフシュタンの影に一本の担当が刺さっていた。
―影縫いー
「こんなもんであたしの動きを。まさか、お前」
私のやることに気づいたようだ。
「月がのぞいているうちに決着を着けましょう」
「歌うのか、絶唱」
「翼さん⁉」
「防人の生き様、覚悟を見せてあげる。あなたの胸に焼き付けなさい」
ｌＧａｔｒａｎｄｉｓ ｂａｂｅｌ ｚｉｇｇｕｒａｔ ｅｄｅｎａｌ Ｅｍｕｓｔｒｏｌｒｏｎｚｅｎ ｆｉｎｅ ｅｌ ｂａｒａｌ ｚｉｚｚｌ Ｇａｔｒａｎｄｉｓ ｂａｂｅｌ ｚｉｇｇｕｒａｔ ｅｄｅｎａｌ Ｅｍｕｓｔｒｏｌｒｏｎｚｅｎ ｆｉｎｅ ｅｌ ｂａｒａｌ ｚｉｚｚｌ
私は絶唱を歌いながら近づき、歌い終わり強大なエネルギーが生ま

れ、放たれた。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～志郎ｓｉｄｅ～
嫌な予感がし立花響を守るようにすると巨大なエネルギーが襲ってきた。
「うわああ」
ネフシュタンの鎧の奴は吹き飛ばされた。
巨大なエネルギーの流れがおさまると俺は変身を解除した。
（気配がなくなった、逃げたか）
「翼さぁん！」
キキィ
その言葉と車の停止音を聞いた俺は風鳴翼の方を見た。
ちょうど弦十郎たちも来たようだ。
「無事か翼⁉」
「私とて人類守護の務めを果たす防人。こんなところで折れる剣じゃありません」
そう言いながら振り返ると本人は目や口から血を流していた。
言い終わると倒れてしまい弦十郎が駆け寄り、
「翼さぁん！」
立花響の絶叫が響いた。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
つづく

第十話　～失敗作と槍の修業～

人間は完全に他人の代わりになるのは不可能だ、だからいなくなった者の穴は自分なりのやり方で支えるしかない。

～志郎ｓｉｄｅ～

あの戦いの後風鳴翼は病院へ搬送され治療を受けている。

（あの攻撃はウルトラダイナマイトのような反動がデカい技なのか、それにしてもあいつも俺とは違うがいろいろ背負っていたのだな）

俺は緒川慎次からの話でそんなことを考えていた。

（まあいつまでも心配しても意味がない、ひとまず弦十郎の家に戻るか）

そして俺は弦十郎の家に先に戻ることにした。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～響ｓｉｄｅ～

「奏さんの代わりだなんて」

緒川さんのお願いを聞いてから数日私はあの後二課での会話を思い出していた。

「気になるのはネフシュタンの鎧を纏った少女の狙いが響君だということだ」

「それが何を意味しているのかは全く不明」

「いいや、個人を特定しているならば我々二課の存在も知っているだろうな」

「内通者ですか」

「なんでこんなことに」

「私のせいです。私が悪いんです。２年前も今度のことも、私がいつまでも未熟だったから翼さんが」

そんな中その時の私は原因が自分にあると思っていてそんな言葉が出ていた。

「私だって守りたいものがあるんです。だから　」

そこまで思い出していると

「響」

「未来」
　隣に親友の未来が来ていた。
「最近一人でいることが多くなったんじゃない？」
「そうかな、そうでもないよ。私ひとりじゃ何にもできないし。あっ、ほらこの学校にだって未来が進学するから私も一緒にって決めたわけだし。あっいやなんて言うかここって学費がびっくりするくらい安いじゃない、だったらお母さんとおばあちゃんには負担掛けずに済むかなぁって」
　そこまで言うと未来がそっと私の手を握ってきた。
「やっぱり未来には隠し事できないね」
「だって響無理してるんだもの」
（未来にはかなわないなぁ）
「でもごめん、もう少し一人で考えさせて。これは私が考えないといけないことなんだ」
「わかった」
「ありがとう、未来」
　そのあと未来から私は私のままで成長してほしいことを言われたり、こと座流星群の動画を見せてもらった。
　光量不足で見えなかったけど。
（私にだって守りたいものがある、私に守れるものなんて小さな約束だったりなんでもない日常くらいなのかもしれないけれどそれでも守りたいものを守るために私は私のまま強くなりたい）
　その思いを胸に私はある場所へ向かった。
「たのもぉ！」
「うぉ、何だいきなり」
「立花響、立ち直れたのか」
　弦十郎さんと志郎さんがいる家に行き頼んでみる。
「私に戦い方を教えてください」
「俺が？君に？」
「はい、弦十郎さんならきっとすごい武術とか知ってるんじゃないかと思って」

「立花響、俺はいいのか？まあ俺も人に教えるほど強いわけでないからいいけどな」
　志郎さんの疑問に私は
「志郎さんは志郎さんですごい武術とか知ってそうですけど先ずは地球の武術からかなぁって」
「そうか」
　納得してもらえたようだ。
「うーん、俺のやり方は厳しいぞ」
「はい」
「時に響君、君はアクション映画とかたしなむ方かな？」
「はえ？」
　その質問に少し疑問に思いながらも私の修業は始まった。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～志郎ｓｉｄｅ～
　立花響が弦十郎に弟子入りしてからの修業内容はこうだ。
　映画見てその構えをまねてみたり走り込みをしたりパンチの練習などだ。
　最初と謎の助言を除けばちゃんとした修行だと思う。
（実際実力は上がってきているようだしいい傾向か。それにしても何か胸騒ぎがするな）
　そんなことを感じながら修業風景を見ていた。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
　場所は変わりどこかの屋敷
～???ｓｉｄｅ～
「野卑で下劣、そんな男にソロモンの杖が既に起動していることを教えるどおりはないわよね、クリス」
　私はお仕置きのために拘束しているクリスの頬に手を当てる。
「うれしい？かわいそうなクリス。あなたがぐずぐず戸惑うからよ、手間取ったどころか空手で戻ってくるなんて」
「これでいいんだよな？」
「何？」

「あたしの望みをかなえるためにはお前に従っていればいいんだよな」
「そうよ、だからあなたは私のすべてを受け入れなさい。でないと嫌いになっちゃうわよ」
　そして私はクリスに電流を流した。
「少し時間が掛かったけどこれであいつに対抗できる、フフフッ」
　私がクリスにお仕置きをした後複数の銀色のカプセルと赤い機械、ライザーを見てほほ笑んだ。
　～ｓｉｄｅｏｕｔ～
　～志郎ｓｉｄｅ～
「はぁ～、朝からハードすぎますよ」
「頼んだぞ、明日のチャンピオン」
　立花響と弦十郎がそんなことを言いながら二課で休憩していた。
「自分でやると決めたくせに申し訳ないんですけど、うら若き女子高生に頼まなくてもノイズと戦える武器って他にないんですか？外国とか」
　そんな疑問に弦十郎は
「公式にはないな。日本だってシンフォギアは最重要機密事項として完全非公開だ、ただウルトラマンに関してはネット上で目撃情報が出てきているな」
「仕方ないことだろう、あの姿を完全に見せずに戦うなどウルトラマンでも不可能だ」
「ええ、私あんまり気にしないで結構派手にやらかしてるかも」
　その言葉に友里あおいと藤尭朔也が
「情報封鎖も二課の仕事だから」
「だけど時々無理を通すから今や我々をよく思っていない閣僚や省庁だらけだ。特異災害機動部二課を縮め〝トツキブツ〟って揶揄されてる」
「情報の秘匿は政府上層部の指示だってのにね、やりきれない」
（また偉いやつら同士、国同士のめんどくさいにらみ合いということか）

そう思いながら政府と話し合いに行っている了子さんを待つことにした。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

つづく

第十一話　～失敗作ともう一つのライザー～

策を練るのはいいが策に溺れたら意味のないことだ。
～志郎ｓｉｄｅ～
先ほどヒロキ防衛大臣という二課の協力者が襲撃されたという報告が来てあわただしくなっていた。
そんな時に
「大変長らくお待たせしましたぁ」
いつも通りな感じで了子さんが戻ってきた。
「了子君⁉」
「何よ？そんなにさみしくさせちゃった？」
「広木防衛大臣が殺害された」
「ええっ、ホント⁉」
戻ってきたときの雰囲気と今の反応から襲撃の件は知らなかったようだ。
「複数の革命グループから犯行声明が出ているが詳しいことは把握できていない。目下全力で捜査中だ」
「了子さんに連絡が取れないからみんな心配してたんです」
そんな立花響の言葉から了子さんは自信の連絡端末が壊れていることを告げ、政府からの機密資料が無事なことを伝えた。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～響ｓｉｄｅ～
あの後私たちはデュランダルを別の場所に移動させる作戦を行うことになり今アビスから取り出されるデュランダルを見ています。
「へぇ、あそこがアビスですか」
「東京スカイタワー3本分、地下１８００メートルにあるのよ。はい、予定時間まで休んでいなさい。あなたのお仕事はそれからよ」
「はい」
そして寮に戻ると私を待っていたのは
「ちょっと、朝からどこ行ってたの？いきなり修業といわれても」
未来からの問い詰めでした。

「あ～っと、え～っと、その～、つまり…」
「ちゃんと説明して」
「あら～、ごめんもう行かなくっちゃ」
　私はその場から逃げるように二課に急いだ、実際逃げてるんですけどね。
「絶対未来怒らせちゃったよね。こんな気持ちじゃねられないよ」
　おもむろに置いてあった新聞を見ると『風鳴翼過労で入院』とあった。
　なぜそうなってるのか疑問に思っているとそれに答えるように
「情報操作も僕の役目でして」
「緒川さん」
「翼さんですが一番危険な状況を脱しました」
　それを聞き私は安心した。
　そのあと緒川さんと話して任務に備えました。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～志郎ｓｉｄｅ～
　朝となり了子さんの車と黒の二課の車４台、計５台とヘリ１台が準備された。
「防衛大臣殺害犯を検挙する名目で検問を配備。記憶の遺跡まで一気に駆け抜ける」
「名付けて〝天下の往来独り占め作戦〟」
　そして俺は弦十郎と職員と共にヘリに乗った。
　高速を渡っているときに一部が崩れ車１台が犠牲となった。
「敵襲だ、まだ目視で確認できていないがノイズだろ」
　横から弦十郎が指示を出している。
「狙いがデュランダルの確保ならあえて危険な地域に滑り込み攻め手を封じる算段だ」
「弦十郎、その作戦の勝算はどれくらいだ？」
「思い付きを数字で語れるものかよ」
「そうか」
　了子さんの車だけだが何とか狙い通りに行ったがノイズの攻撃に

より転倒し二人が離れたところで爆発した。
「見えん」
「俺もだ」
爆発の煙により俺たちは現場の状況がわからなかった。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～ネフシュタンの少女ｓｉｄｅ～
「こいつ戦えるようになっているのか」
あたしは下でノイズどもと戦っている融合症例を見てそうつぶやいた。
（このままだとデュランダルの回収も手こずっちまう）
そう思いあいつから渡されたカプセルを起動させてライザーっていう機械でスキャンした。
〈ベムスター〉
「いっちょ暴れてこい！」
その言葉と共にカプセルに描かれてた怪獣が現れた。
（今のうちにデュランダルの確保だ）
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
～志郎ｓｉｄｅ～
ピギャァァァ
「なんだあの巨大な化け物は⁉」
５角形の腹にくちばしと角を持つ顔、間違えなくベムスターであった。
「あいつはベムスターだ。奴の出現の仕方からして誰かに召喚されたのか」
「何っ⁉あちらの状況も把握できていないというのに。志郎君行ってくれるか」
「わかった、そして爆発させないように、だろ？」
「そうだ、頼んだぞ」
「あぁ、とっておきで行く」
ライザーを構え、２本のカプセルを起動させる。
１本目は真紅の体にプロテクターと白のラインを持つウルトラセ

ブンに似たウルトラ戦士、ザージ。
２本目は赤く発行する目を持つグローザ星系人、氷結のグロッケン。
いつものようにライザーでスキャンする。
〈フュージョンライズ〉
「研ぎ澄ます氷結」
〈ザージ〉〈グロッケン〉
〈ウルトラマンヴォルン　カオスブリザード〉
今回俺は冷気を放ちながら青みのある銀の体に黒のライン、両腕に氷の盾を持った姿を現す。
「ジュワァ、ジュワ」
「ええっ⁉今度はなんだか寒そうな姿に」
立花響は俺の姿にそんな印象を受けたらしい。
（それもそうだろう、氷技の特異な組み合わせなのだから）
ピギャァ
あいつも俺に気づいたようだ、長引かせて余計な被害を出さないために俺たちを隔離することにした。
「ジュワッ（ブリザードドーム）」
ブリザードドーム、それは体から発生された冷気を操りドーム状の吹雪の結界を作り出す技だ。
（これで周りの被害は抑えられる）
「ジュワッ（フリーザーショット）」
俺は手始めに手から冷凍光線を放つ。
ピギャァ、ゴクン
ベムスターは冷凍光線を腹の口で飲み込んだ。
（やはりエネルギー系では効果がないか）
そこで右手を口の前にもっていき冷気を吐くと手を覆い氷の刃が生成される。
エネルギーが駄目なら物理と安直な考えだが時間がない。
右手で斬りつけ左手で殴る。
ピギャァ

ベムスターも負けじとこちらをはたいてくる。
（このままでは無駄に時間を食うだけだ。何か決め手を）
そう考えているとベムスターもそう考えていたのか頭の角から黄色い破壊光線を撃ってきた。
「ジュッ、ジュァ」
まさか近距離から撃つとは思わず数発受けてしまったが途中から盾で防いだ。
ティロン　ティロン
そんな時カラータイマーが鳴り始めた。
（ドームを発動させながらの戦闘はきついか、まあどっちにしろ被害を出せないからあまり長引かせることは出来ないか）
そう思いドームに使っている冷気以外を右手に集中させて刃から槍に変えて放つ。
「ジュワァ（アイスエイジピアシング）‼」
ベムスターは槍を吸収しようと腹を開けて受け止める。
しかし槍が触れた瞬間どんどん凍り付いていく。
ピギャァ、ァァ
（うまくいったな。あとはこいつを宇宙で破壊するだけだな）
完全に凍り付いたベムスターを見てそう思い、ドームを解除しようとすると外から光の剣のようなものが迫ってきていた。
～ｓｉｄｅｏｕｔ～
つづく

第十二話　～失敗作の単独行動～

自分の目的をほかのだれかに邪魔されたくなければ一人で迅速に行動するべきだ

◇◇◇

（なんだこれは⁉防がないと）

ドームを解除せずにそのまま受け止める。

（防げなくはないがエネルギーが持つか）

そんな不安に駆られたがギリギリのところで軌道が逸れ、地面に当たる。

その時に薬品工場の一部を破壊したのか爆発が起きた。

「ジュワ（一体何が起こったんだ）」

ドームを解除して見えた光景は悲惨だった。

被害を出さないように戦い、そして勝ったというのに燃える工場地帯。

「ジュエッ（早く消火しなければ）」

俺はベムスターの氷像を安全な場所での破壊を後回しにし冷気を利用した消火活動に移った。

途中、消火部隊が来たので交代しベムスターを破壊しに動いた。

◇◇◇

それから数日、広木防衛大臣の繰り上げ法要、そして二課本部の強化が行われた。

◇◇◇

俺はベムスターを召喚したのが誰なのか考えていた。

鎧の奴が市街地へと現れ目下立花響と交戦中であると連絡が来た。

『私の名前は立花響、年齢は―』

（なに敵に自己紹介してるんだ）

そんなことを思いながら映像を見ていた。

『吹っ飛べ、アーマーパージだ！』

ネフシュタンの鎧が吹き飛んだかと思うと歌が聞こえた。

『Ｉｃｈｉｉ―Ｂａｌ』とスクリーンに映った。

「弦十郎、今のうちに飛び散ったネフシュタンの鎧の回収に行く」
「わかった。状況は逐一報告する、頼んだぞ」
弦十郎から許可をもらい現場へ急いだ。
その現場では風鳴翼が鎧の奴と戦っていた。
「立花響、風鳴翼、そいつと戦って時間を稼いでくれ、その間に鎧を回収する」
「なっ、やらせるかよ」
俺の言葉に反応した鎧の奴は2つのカプセルとライザー。
（なぜあいつがカプセルとライザーを持っている、あいつは私の兄弟（同じ失敗作）にはいないはずだ）
〈フュージョンライズ〉
〈ベムスター〉〈ガンQ〉
〈ウルトラマンベリアル　ベムQ〉
そしてあいつはベムスターの腹部のような右手、ガンQの目のような左手を持つベリアル融合獣に変身した。
「人が怪獣になった⁉」
「あいつが親玉か」
「鎧の回収を後回しにしてあいつを捕らえる」
私はライザーを構える。
（敵を生きたまま捕まえるならこいつだ）
1本目は銀の体に炎のような模様の赤いライン、そしてウルトラマンエースに似た顔つきのウルトラ戦士、フレア。
2本目は赤い瞳のヒッポリト星人、地獄のジャタール。
〈フュージョンライズ〉
「触れろ、地獄」
〈フレア〉〈ジャタール〉
〈ウルトラマンヴォルン　ヘルハンズ〉
私は銀の体に黒と赤のラインを持った姿になった。
『あたしにこいつを使わせたんだ、てめぇをぶっ倒す』
「シュッ（それは私のセリフだ）」
ファイティングポーズをとり互いに攻撃を仕掛ける。

牽制としてハンドスラッシュを撃つが右手で吸収し左手で反射してきた。
（ちっ、光線の反射ができるのか。だがゼットンのように格闘までは出来ないだろう！）
そこからは光線技は使わずに拳や足による格闘技で攻めていく。
相手は手の構造的にこちらにはあまりダメージが来ない。
『なんでダメージを与えられないんだよ』
「シュエッ（特性も知らずに使うからだ）」
そして私はベムQに両手で触れる。
すると触れた部分からブロンズになっていく。
『どうなってんだ。くそっ、解除だ』
その言葉と共に変身は解除された。
こちらも少し離れたところで解除し問い詰めようと近づくとノイズが襲ってきた。
「なっ」
ノイズに触れないように回避し少ししたら消えたので立花響たちと合流したがネフシュタンの鎧の回収は失敗しイチイバルの奴には逃げられたそうだ。
そのあと本部に戻り私は
「弦十郎、少しの間別行動をとらせてくれ」
「理由を教えてくれないか？理由によっては許可できない」
「理由は簡単だ。基本私や私の兄弟、あの方にしか使えないはずのライザーを使っていた奴にライザーの出所を聞き出す」
「それは許可できない」
「なんだとっ⁉」
弦十郎の答えに俺は声を上げたが声と雰囲気から本気であると感じられたため譲歩することにした。
「わかった。手荒な真似はしないし聞き出すのも許可が出てからにする」
「少し不安な感じだが許可しよう」
「感謝する」

そう返した後私は急ぎ足で外へ移動する。
「勢いに任せて出てきたものの何の手掛かりもない」
（人海戦術をしたいがあの力（星人召喚）はあまり使いたくないな）
そんなことを考えながら虱潰しに探すが見つかるはずもなく数日経過した。
「くそっ、ここまで何もなしかこんなことなら変にこだわらずに使えばよかったな」
そう愚痴っていると車が数台近づいてきた。
「おっ、弦十郎じゃないか何か進展でもあったか」
車に乗せてもらい状況を確認した。
「これから敵の本丸に行くところだ」
「なら私も行こう。使える手は多い方がいいだろう？」
「来るのは構わないがこの前も少し引っかかったが一人称が〝私〟になっているぞ」
「気にするな、それより今は本丸に行くのが最優先だろ」
「あ、あぁ、そうだな」
その言葉と共に車は再発進した。
（志郎君はあの娘がライザーを使ってから様子が変わった、少し注意しておこう）
数十分かけて敵の本丸らしき屋敷に着いた。
（なんというか隠れ家としてはもう少し地下に隠すなりした方がいいんじゃないか）
そんなことを思いながら奥を進んでいくとそこには
「あっ、ちがっ、これはあたしじゃなくて」
兵士らしき複数の死体と私たちを見て驚きあたふたしている鎧の奴がいた。
ライザーを渡してもらうために近づいていく。
「安心しろ、誰もお前がやったなどと疑ってはいない」
「そもそも私はそんなことよりもお前が持っているライザーを―」
「風鳴司令っ！これを」
セリフを中断しそちらを見ると『Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｙｏｕ　ＳＡＹＯ

ＮＡＲＡ』と書かれた張り紙があった。
（おそらく私たちに送られたメッセージなのだろう）
そんなことを思った次の瞬間私たちは爆発に飲み込まれた。
◇◇◇
つづく